

国民生活様式の

五十年

王 雅 林 ・ 唐 魁 玉

本論文は文献分析、ケーススタディ、社会言語学的方法により、中国における改革前の三〇年間で改革後の二〇年間の国民生活様式の変遷について俯瞰的記述と解釈を行うものである。設定した研究目標は、中華人民共和国成立後五〇年間にたどってきた二つの時代、すなわち毛沢東時代と鄧小平時代における中国国民生活様式の発展の道を明らかにするとともに、中国国民が五、六〇年代の理想主義的イデオロギーの色合いが濃厚なユートピア的生活様式の追求とどのように訣別し、七、八〇年代の現実主義、消費主義傾向の顕著な開放型生活様式へと踏み出していったのかという問いに答えることである。最後に中国の将来における国民生活様式の基本的方向について展望を試みる。

一 研究の背景と方法

本論文は中華人民共和国成立以来（一九四九～一九九九）の国民生活様式の発展の軌跡及びその具体的社会条件との相互関係について社会学的研究を行うものである。生活様式が表現するのは、人々が一定の文化パターンに基づいて生活資源に対して行う調達配置の方式である。もしくは人々が自分の生活をいかにアレンジするかという方式である。生活様式は人々の生活の必要を満たすことと関係があり、同時にまた一つの社会、一つの集団あるいは一人の人間の価値観の現れでもある。本論文の考察する生活様式の主体は「国民」という社会共同体である。

改革・開放が始まってから、中国の学者の間で生活様式に関する研究がブームになったことがある。八〇年代だけでも二〇部近くの生活様式研究に関する専門的著作や数百編の論文・研究報告が出版された^①。ところがこれ以前には「生活様式は中国においては科学的研究の対象ではなかったばかりか、社会生活の中ではしばしば否定的意味で使われてきた。例えば誰それは「ブルジョアの生活様式に染まっている」といった具合に。理論の運命はまさに時代の運命を映すものなのだ。しかしながら、「生活様式」という語を否定的に用いたからといって、あの時期に国民生活様式が存在しなかったことにはならない。八〇年代以降の生活様式に関する研究が関心を示したのは、主として改革後の中国人の生活様式の変遷状況であり、改革前の三〇年間における中国人の生活史資料に対しては研究と整理が十分ではなかった。さらに欠けていたのは、二つの時期の生活様式に対する一貫した研究であり、しかもこうした研究は中国の五〇年間における社会変遷プロセスの理解と認識に役立つものである。

中国の国民生活様式及びその変遷に影響を与える要因としては政治イデオロギー、制度変遷、経済、技術媒介、グローバル化等がある。ところで、一九四九年の中華人民共和国の成立、一九七八年の「三中全会」から一九九九年に至る社会転型プロセスにおいて、各種要因が国民生活様式

に及ぼす影響の重要性和順序はそれぞれの時期ごとに異なり、多くの場合、さまざまな要因が互いに作用し合った結果であることに気づく。生活様式とこれに隸属する思想觀念の間には微妙かつ不可分の関係があることから、ある時期のイデオロギー、すなわち「さまざまな情感、幻想、思考様式、人生観から構成される全上部構造」は生活様式に対してきわめて大きな影響を与えるとわれわれは考える。文革、大躍進、人民公社期を含む改革前の三〇年間の国民生活様式にはイデオロギーの烙印がくつきりと焼き付けられたのである。

本研究は改革の前と後の半世紀の中国国民生活様式史を整理しようと試みるものである。この研究で用いる主要な手法は文献分析、ケーススタディ、社会言語学的解析である。文献分析には、各歴史的時期の人物や日常生活の細部、及び「文化大革命史」「死亡者記録」「配給切符記事」「統計年鑑」等の文字で書かれた資料に対する分析が含まれる。ケーススタディとは、研究の中で反右派、文革、大躍進、大飢饉、知識青年の下放運動等の時期における国民生活に重点を置き、総花的な言及をすることではないことを指す。できる限り中共党史、経済史ではなく社会学的分析の枠組みと学術用語を用いる。社会言語学的解析とは、各時期に世間で流行った民謡、民間諺言、愚痴、「順口溜」(軽口)等について分析を行い、その背後にある社会問題を明らかに

にしようとするものである。改革前の三〇年と改革後の二〇年では中国国民の生活状態及び研究資料が異なるため、本論文の記述においても重点の置きどころに差がある。すなわち、前者においては生活様式史の描写と分析に、後者においては論題の解釈と分析に重点を置いた。

二 改革前における

中国国民生活様式の発展の軌跡

一九四九年に中華人民共和国が成立し、これより中国は二八年の長きにわたる「毛沢東時代」に入った。一九七八年に中共第一期三中全会が開催され、ようやくこの時期は終わりを告げた。これは社会学者が真剣に整理・回顧するに値する国民生活の道程である。

(一) 建国初期（一九四九～一九五二）

一九四九年の建国から、二年あまりにわたる国民党残余軍隊肅清の後期作戦、チベットの平和解放、官僚資本の没収、物価の安定、及び朝鮮戦争等の事件を経た後、中国人民はついに平和な時代を迎え息をつくことができた。中国が独立・解放をかちとることができたのは中国共産党が人民を指導したことによるものであったから、共産党は政治的に民心を得ていた。土地の分配を受けたばかりの農民と

仕事に就いてまもない都市労働者及び知識人は、みな新しい生活に対する理想と期待に満ちあふれていた。国民党の役人たちの腐敗とは対照的に、主として農村と都市の知識人から成る中国共産党員たちの、精励して国を治めようという意気込みや刻苦奮闘の気風は、民衆を深く感動させた。このため当時の国民生活レベルはたいへん低いものであったが、幹部・知識人であろうと、労働者・農民であろうとに拘わらず、人々の生活状況には大して差がなかったから、農民が大学教授より少し貧しくても、生活の気分に影響を及ぼすことはなかった。一九五〇年末の朝鮮戦争への参戦を例にとると、当時は毛沢東から、下は庶民まで、さらには資本家、僧、尼までが「金のある者は金を、人を出せる者は人を、力を出せる者は力を」と叫び、人民の愛国の熱情は空前の高まりをみせた。

残念なのは、この時期の国民生活について細かな記録をした中国人学者はほとんどいなかったことである。むしろ『ケンブリッジ中華人民共和国史』の著者たちが生き生きした資料を収集している。例えばダーク・ポートは北京滞在中の最初の年に初めて伝統劇が上演された際の情景を書き残している。観衆は「封建制度の残りかすを取り除け」と声高らかに叫び、劇場を去ることを拒んだという。政府のスポークスマンが出て来てなだめようとすると、観衆はその男に西瓜の種を投げつけた。当時の人々が喜んで観たの

は昔の辛い生活を映し出した革命劇『白毛女』だった。こうした文化生活のイデオロギー化、政治化の傾向は六、七〇年代における中国の「模範劇」の主たる審美観の特徴にまでなった。

数年間の苦勞を経て、一九五二年には、中国の国民経済は基本的に回復し、全国の農工業総生産額は一九四九年比で七七・五%の伸びを示した。⁽⁶⁾国民の物質的生活レベル、教育水準にもかなりの進歩がみられた。制度の変遷が社会生活に及ぼす影響の大きさが分かる。歴史学者をもっと驚かすのは、新政府の役人たちの効率の高い仕事ぶり⁽⁷⁾と親しみやすい態度である。そして給与をもらわず、初期供給制の生活をしていたあの「老八路」たちである。それは腐敗のない、理想主義に満ちた、集団で歌を歌うことのみを知っていた時代であった。

(二) 「第一次五か年計画」期（一九五二—一九五六）

一九五二年から一九五六年までは、中国の「第一次五か年計画」期であった。さまざまな資料が示すように、この時期は中華人民共和国成立後の高度経済成長と国民生活レベルの向上が最も速い時期の一つだった。第一次五か年計画期の中国における住民消費レベル年平均増加率は四・二%で、うち農民が三・二%、都市住民が四・八%であった。建国以来の中国社会発展指数に関する袁方の研究によれば、

一九五二年から一九五七年までに、中国の社会総生産指数は九七・八%上昇した。うち経済、政治、文化、出生の産出指数はそれぞれ一七・八%、三二・六%、二七・二%、二二・三%の伸びを示した。⁽⁸⁾これが中国の「最初の黄金時代」であったといつてよい。

アメリカのプリンストン大学教授ロツマンが『中国の現代化』という本の中で、やはり中国の五〇年代中期における社会発展をたいへん重視し、一九五五年こそは中国の長期的転換プロセスを観察するのに最適の年であると考えていることに注目したい。彼は、この時期の中国共産党指導者たちが仕事に着手するやたちまち成功を収めたことの原因を、高いレベルの社会調和を成功裏に進めたことに帰結させている。⁽⁹⁾しかしながら彼は同時に、農村地域社会の日常生活様式は環境が大きく変化化したものの、その実質的内容の変化は微々たるものだと考えている。

ここで指摘しておかなければならないのは、「第一次五か年計画」は周恩来、陳雲の主導下で、大きな成功を収めたとはいえ、中国の人口の多さ、底の薄さ、労働力の質の劣っていることにより、当時の人々の生活は依然としてきわめて貧しかったということである。特に辺境地域ではそれが際だつていた。社会学者費孝通は五〇年代に貴州へ旅した際のことを語ったことがある。彼の言によれば、「当時私は中央訪問団に参加していたのだった。映画上映チームを率

いて、畢節へ行った。畢節地区の人々は当時映画など見たことがなかったので、映画上映ということが伝わると、みんな見に来ようとした。ところが一部の家庭では一家全体で一着しかズボンがないため、尻を出したままの格好で映画を見に来た人がいる。これはいけない、というわけで、連夜たさんの女性たちを動員して、持っていた布をズボンに仕立ててもらい、映画を見に来た人がズボンをはいていなかったら渡すようにした¹⁰。生活は苦しかったが、人々の精神状態は良好であったのである。

生活様式の価値観においては、当時すでに社会主義イデオロギーを主導とする傾向が明らかになっていた。娯楽生活はソ連を模倣し、伝統に反対しようというもので、ハリウッド映画は批判され、ソ連製と国産の映画がこれに取って代わった。服飾の面でも、洋服は「ブルジョア」のものとみなされ、旗袍等の民族服も批判を受けた。社会的に中山服、解放服ないしはレーニン服と呼ばれるものが流行った。その後白の上着、青いズボンが流行ったこともある。これとともに、知識人の思想改造が、早くも一九五二年前後には始まった。黄炎培、章乃器、馮友蘭、鐘敬文、黄葉眠ら多くの著名な知識人が、『光明日報』や『人民日報』に自分の生活様式を含む自己批判の文章を発表した。楊絳の小説「入浴」はこのキャンペーンの細部を記録している。こうした思想改造キャンペーンは顧准、張中暁のような思

想史上の数知れぬ失踪者を生んだばかりでなく、生活様式の変化プロセスに対しても深い影響を及ぼし、中国国民の生活様式を相対的に緩やかな環境から単一、モノトーンなものへと変えていった。すなわち、人々の思想に対する改造は、衣食住行等の生活様式に対する個人的選択行為をも束縛することになったのである。

(三) 「反右派」拡大化の時期（一九五七）

体制内知識人であれ、体制外知識人であれ、一九五七年という年が、中国の知識人の運命に影響を与え、それ以降数十年間の政治生活において片隅に追いやられ、ひいては批判の対象となることを決定づける重要な年になろうとは、誰も予想できなかった。歴史的文献に記載されているところによれば、一九五六年の春から一九五七年の夏にかけて、一部の著名な知識人たちが毛沢東の「百花齊放、百家争鳴」に関する呼びかけに応えるべく、誠意ある批評意見を書き起こした。この中には章伯鈞、羅隆基、費孝通、馬寅初らが含まれる。最も著名なのは費孝通の「知識人の早春の陽気」と馬寅初の「新人口論」¹¹である。前者が文章の見事さと情熱で名高いとすれば、後者は冷静さと理知とで先んじている。馬寅初は心から憂えつつ「人口抑制は一刻の猶予もならない」と警鐘を鳴らし、人口抑制を行わなければだめだと声を上げた。

ところが、すべては人々の願いどおりには運ばなかった。

「蛇を洞からおびき出した」後は、「集めてこれを殲滅する」かのように、「反右派キャンペーン」が全国で全面的に展開された。キャンペーンは一年ほど続いた。参加者の中には著名な体制内・体制外の知識人たちがおり、大学生もいた。

中国人民大学の学生魯丹はこの間の政治生活の体験を書き記しているが、特に自分の級友潘学君が激情あふれる自己批判発言から誤って右派として除名されるに至る過程を描いている。この本の中では、級友たちの相互告発、さらには自分の恋人を売り渡したことからたらされる心理的プレッシャーと苦しみが描かれている。一部の級友たちは何らの過ちも犯していないのに、指標数につじつまを合わせるために右派にされたのである。反右派拡大の深い影響は、キャンペーンで直接被害を受けた五五万の右派及びその家族、子女の範囲を大きくはみ出すものであった。最も重要なのはこれらの右派及びその家族・子女の反右派キャンペーン以降の生活が如何に苦難に満ちたものであったかということそのものではない。権威ある公式な言葉の中で知識人はもはや人に羨まれ尊敬される存在ではなくなったことがより重要なのである。知識人たちの生活は強制的に変えられた。大学生、教授、学者はたちまち労働改造の対象となる犯罪者として下放させられた。社会言語学的角度からみると、反右派キャンペーンが始まってからというも

の、知識人という語はしばしば「地主」「富農」「反革命」「不良分子」「牛鬼蛇神」「妖怪変化」「中山狼」（恩を仇で返す人）「毒蛇」「狐のお化け」「毒蜂」「臭老九」（九番目の鼻つまみ者）等の語と一緒にされた。事実上知識人を主流言語体系の外に排斥したに等しかった。こうしたイデオロギー的な生活様式が知識人にとって何らかの役に立つところがあつたとすれば、ただ一つ、オイケン言うところの、挫折と不幸は一種の精神生活として人の精神を高めることができる、ということだけだ。

知識人の生活のひどい運命と異なり、一九五七年という年は普通の労働者・農民、ひいては幹部の日常生活にはそれほど大きな影響はなかった。このキャンペーンの規模は、やはり何といつても、この後の文化大革命と同日に論じることができないからである。統計数字からみると、一九五七年の全国住民一人あたり消費水準は一〇二元で、一九五六年の九九元よりやや高くなっている、⁽¹⁵⁾ 買い物、医療、外出、水道等の面で、住民生活の便利さはいくらか高まった。

(四) 大躍進、人民公社化の時期（一九五八〜一九五九）

大躍進と人民公社化は、ほとんど同時に中国で展開された。異なるのは続けられた時間の長さで、前者が一九五八年に失敗して終わりを告げたのに対し、後者は一九五八年の人民公社の成立から一九八四年の人民公社の解体まで続

いた。中国の農村は人民公社制度のもとでまるまる二六年間も過ごしたのである。これは毛沢東時代の中国の現代化の道程において生じた最大の過ちの一つであり、革命的変遷というよりは、中国が伝統から現代へと向かう中で非理性的なユートピア運動であった。

大躍進が起こった背景には、毛沢東を含む当時の中国の指導者たちの大多数が情勢を見誤ったということがある。

中国はすでに大きく前進するための条件と大衆の基礎を備えていると考え、一五年以内にイギリスを追い越し、アメリカに追いつこうと性急なスローガンを打ち出したのである。⁽¹⁶⁾河北省徐水では「共産主義に歩みを進めよう」というスローガンまで現れた。⁽¹⁷⁾河南省花県では「一九六〇年に共産主義に移行する」と宣言し、美しい未来図を描いた。

「誰もが新しい楽園に入り、飲み食い・衣服に金は要らず、鶏鴨魚肉は味がよく、毎食四皿料理が食べられ、毎日果物が食べられ、いろんな服が着放題、天国はいいと人は言うけれど、天国だって新しい楽園にはかなわない⁽¹⁸⁾」。

このほか、山東省寿光県では「人は肝つ玉太く、土地は高生産」という大言壮語を叫んだ。『人民日報』は徐水県大寺各庄人民公社の小麦生産高が一ムー(二ムー)約六・六六七a)あたり六万kg、山芋一ムーあたり六〇万kgなどという特大高生産のニュースを報じ、大「衛星」を打ち上げた。⁽¹⁹⁾これと同時に、人々は「土高炉」を用いて質の劣悪な鋼塊

の生産を始めた。このために公共食堂等のサービスマで開設した。大躍進はまた人々に生活様式の変更をも要求した。五〇年代初期に帰ろうというのである。刻苦質素な気風が讃えられ、「ブルジョア的」及び伝統的な行動様式は批判された。暇な時間には、政治的文献を学び、「党に心を渡す」ことが求められた。⁽²⁰⁾これは逃れるすべのない、困惑以外のなものでもない生活様式であった。さらに二千万の農民が運動の中で都市住民に変わり、都市地域社会に対するプレッシャーを著しく増やした。⁽²¹⁾もしかしたらこれこそまさにブロードイル言うところの、人類の歴史は人々が生存状態を改善するために行うところの物質的・精神的歴史局限性を突破しようとする不断の努力である、ということかもしれない。⁽²²⁾

人民公社は一九五八年四月に、合作社から発展して生まれたものである。「公社」という語は劉少奇、周恩來らが提起したものであるという。毛沢東が最終的に公社の青写真を描き、「昔の人が考えたユートピアが、実現され、しかもこれを超えることになる」と指摘した。具体的には美味しい食物、色とりどりの服装、電灯・電話・水道・ラジオ・テレビのついている家屋、それに飛行機に乗って出掛ける旅行、誰もが高等教育を受けられる等々が含まれた。康生はさらに一編の詩を作った。「共産主義は天国であり、人民公社はそれに至る橋である」。⁽²³⁾

また、人民公社の急速な発展と同時に、「公社員はみなひまわりだ」という歌も流行った。人民公社に対する人々のほとんどユートピア的な依頼感を現している。ところが、人民公社はほんのひとときの繁栄の後、たちまち人々を失望させた。人民公社化の失敗と終結について、富永健一は劉少奇の現代主義産業路線がついに毛沢東らの土着路線に取って代わることができなかつたことにその原因を帰結させている。

勿論、人民公社は現代社会における一種の公共生活組織として、一定の歴史的役割も果たした。ハバーマスは、公共生活は交流行動に対して積極的な影響を及ぼしうると考えている。張楽天も、社会の自主性、大衆性、民間性の角度から、公社は伝統的な村落社会を「消滅」させたと述べている。なぜなら公社は国の一部であり、国の政治権力は公社を通じて一つ一つの自然村落まで浸透して、農民の生活行為を支配するからである、という。確かに、公社は一種の特殊な「社区」もしくは村の「社会」組織であり、こうした表面的にみれば新しい組織制度体系の中にも、実際には限られた範囲内ではあるが伝統的な制度と交流のパートナーが認められる。こうした情況が伝統性とユートピア性が併存する公社生活の構造をもたらした。特に人民公社の実行したいわゆる「三化」、すなわち組織の軍事化、行動の戦闘化、生活の集団化は、公社員の労働生活をつねに緊

張・疲労及び無効率状態に置くことになった。生活の集団化の主たる内容である公共食堂は、食糧・油や豚肉等の物品の大量浪費を引き起こしただけでなく、献立の単調さ、質のお粗末さが避け難く、広範な公社員たちの実際の生活に重大な影響を及ぼした。

このほか、人民公社化は家庭生活、労働方式、出産制度、養育スタイル、娯楽様式、ひいては食事のスタイル等、農民の生活の各方面に直接影響した。具体的には、公社制度のもとでは、婦人の家庭における地位がある程度高まったこと、若者の結婚相手を探す方式は「仲人」の「取り持ち」に頼ったこと、面倒をみてくれる子供や親戚友人のいない老人は公社や生産隊で「五保戸」として扶養してもらえたこと、一部の農民は人民公社末期にも計画出産制度を受け入れたこと、等々がある。したがって、中国の農村がかつて実行したことのあるこうした理想主義的色彩の濃い人民公社の生活史を一定程度、理解しなければ、現在の中国農民の生活をしっかりと認識することはできず、ましてや中国の現代化の方向を正しく把握することはできない。

(五) 「大飢饉」時代（一九五九—一九六一）

一九五九年に始まった「大飢饉」は、実のところ一九五八年の「大躍進」及び人民公社化運動によってもたらされた悲惨な結果である。西側の文献をみると、外国の学者は

この間の歴史をきわめて重視している。ダーウエイ・コルコ、ハンティン、ポニー・カイエンらはいずれもこの分野の専門家である。

「飢饉」とは何か？ バディヤの下した定義は、「日常的食品の供給不足により、ある地域の住民が極度の飢餓状態に置かれること」というものである。アラムコは「歴史的にみて、飢饉は主として全面的飢饉、地域的飢饉、階級的飢饉の三種類に分けられる」と言っている。一九五九年春に中国で始まり三年の長きにわたって続いた大飢饉は、明らかに全国的飢饉であった。この大飢饉についての記載で最も詳細を極め、かつ最も驚かせられるのは、都市住民と農民が何を食べたかということである。一九六〇年から一九六一年にかけて、農村ではもうこれ以上何か食べられるものを探すことはできないくらい何でも食べた。酒粕を食べた人もいれば、米ぬかや麦わらを食べた人もいる。木の葉や樹皮を食べた人もいる。やがて人々は土を食べ始めた。安徽省鳳陽県では人が人を食うという事件が六三件発生した。毛沢東ですら、九か月間肉を食べず、栄養不良で両足がむくみ、靴が履けなかったという。死亡者数についてはすでに統計をとるすべがないが、中国科学院が公に発表した報告によれば、一九五九年から一九六一年までの三年間に、「控え目な推定でも、栄養不良で死亡した者は約一五〇〇万人に上る」という。北京大学の林毅夫は論文の中で、

あの三年間に、農業危機によって引き起こされた死亡者数は三〇〇〇万人を超え、このほかさらに出生を三三〇〇万人少なくすることになった、と述べている。青海湖では当時こんなスローガンが流布していた。「魚を一匹多く捕って、人を一人救おう」。

食物等が足りないために、一九五八年から九〇年代初めに至るまで、中国では配給切符制度が施行された。大飢饉及びその後の数十年間、食糧切符、綿布切符、肉切符、野菜切符、マッチ切符、砂糖切符、たばこ切符、お菓子切符、卵類切符、自転車切符、腕時計切符等々、さまざまな配給切符が人々の生活における必需品となった。配給切符が売買できることも、公然の秘密であった。食糧切符を例にとると、地方切符と全国切符の二種類に分けられていた。全国切符は庶民に「満天飛」（あちこち飛び回るもの）と呼ばれていた。当時、自分の戸籍所在区域を離れる場合、この切符を所持していないと、飢えに耐えるしかなかく、少しも動きがとれなかった。最も困難であった一九六〇年、一九六一年には、一部の地域では特需食糧切符を発行した。例えば天津では、一四級から一七級までの幹部には、毎月一二・五kgの食糧が供給された。この等級をもたない人にも特需のある時があった。例えば産婦などである。上海では二五gの食糧切符まで発明した。多くの子供が肉の味を知らないというところまで至っていた。これについては毛沢

東も心を痛めていたという。

(六) 文化大革命期（一九六六—一九七六）

文化大革命は大躍進と同様に、この五〇年間で中国国民の生活に及ぼした影響の最も大きい、最も理性を欠いた、イデオロギー色の濃い大災難であった。しかも、その継続時間は、大躍進よりさらに長かった。「文革」について語る時、多くの体験者は当然ながら自分の経験、個人的感情、回顧を生活の領域において考察する。これは人類学者ウエイレンスの「感情構造」(Structure of Feeling) 定式に符合する⁽³²⁾。彼の主張する「感情構造」は、充分に描かれた日常生活経験と大体系及びイデオロギーの微妙な表現を結びつけたものである。中国で文革後に現れた盧新華の「傷痕」、劉心武の「クラス担任」、張賢亮の「綠化樹」等に代表される「傷痕文学」及び「反思文学」は、こうした現実主義的意義における叙述である。これらの作品はある側面から文革中の国民生活を表現している。中国においては、数十年來イデオロギーがすべてをコントロールしてきた。生活も、思想も、ひいては文化まで、イデオロギーの支配を受けなものはなかった。文化を例にとると、文革期間の主要な芸術様式であった模範劇は、創作においてひたすら政治傾向を追求したため、「パターン化」「没個性化」「雷同化」したものととなり、「革命期の愛情」でさえ贅沢とされた。

文革の政治生活において、最も典型的なものは、多くの暴力的非理性的色彩を帯びた、毛沢東を熱狂的に崇拜する紅衛兵であった。「毛沢東のためならわれわれは如何なる犠牲も恐れない」——一九六七年ないしそれ以降の一時期、紅衛兵の劇や詩歌創作は、一定程度こうした崇拜の真情を証明している⁽³³⁾。「血統論」を批判して有名になり、禍を招いた遇羅克ら少数の醒めた眼を持った者だけが、例外となった。文革中の人々の日常生活には、個人性、自律性はほとんどなく、誰であろうと自主的な余暇生活など話にならなかった。個人のプライバシーですら「革命」のいけにえとなることがあったのである。若者たちの価値理想は徹底的に「自我を棄てる」ことであり、自分を「ゼロ」もしくはネジとみなすことであった⁽³⁴⁾。そして人々が毎日しなければならぬことは主として「大批判」及びきりのない「学習」であった。さらに「三つの忠義」「四つの無限」「五つの堅持」等の活動を展開した。

文革中の国民の主要な生活様式であった政治生活は、主流メディアである『人民日報』『解放軍報』『紅旗』雑誌及び中央人民放送局が主導していたこと、それで多くの難解な社会用語を撒き散らしたにも現れている。例えば、「砲撃」というのは、本当に大砲を使うわけではなく、大字報、大標語、ピラ、スローガンで攻撃するのである。「焼き払う」「油で揚げる」というのも、実際に火や油を使うわけ

ではなかった。また、多くの老知識人や幹部がしばしば回顧するいわゆる「牛棚（牛小屋）生活」の「牛小屋」というのも、中国の農民が牛を飼う小屋と理解してはならない。これは人を押し込めておく場所であった。このほか、「牛鬼蛇神」（妖怪変化）、「黒五類」「遊街」（街頭引き回し）等の用語も氾濫した。

文化大革命はさらに、多くの人の非業の死を招いた。武闘による死亡のほか、迫害されて自殺した人も少なくなかった。「文革死亡者記録」に記載されている政治家、走資派、覚醒者、小人物、「臭老九」、「反革命」、少女、有名人の八タイプ七十二人のケースに対する筆者の研究の結果、次のことが分かった。

(1) 死亡者の性別では、女性が一五名で、全死亡者の二〇・八％、男性は五一人で、七九・二％である。

(2) 死亡者の平均年齢は四九・三六歳。

(3) 職業及び職務では、国家主席、國務院部長（閣僚）、市長、局長、経営責任者、労働者、技術者、医者、大学生、知識青年、公社員、村幹部、軍人、科学者、教授、小学校長、技師、中学生、作家、詩人、俳優、スポーツ選手、翻訳家等々。

うち最も有名な文革の被害者としては、劉少奇、陶铸、彭德懷、鄧拓、張志新、遇羅克、傅雷、老舍、周信芳、容国团、時伝祥らがいる。

知識青年の生活もまた、文化大革命及び七〇年代にまたがる中国国民生活の典型的なパターンであった。知識青年の下放運動は、歴史学者の劉小萌の研究によれば、五〇年代の初めに端を発し、六〇年代初めに最初の高まりを見せたが、「文化大革命」期に毛沢東が「知識青年が農村へ行つて、貧農・下層中農の再教育を受けることは、きわめて必要だ」という指示を発したことから、全国を席卷するうねりとなつていった。一九六二年から一九七九年末までに、一七〇〇万以上の知識青年が内モンゴル、新疆、東北、雲南等の辺鄙で立ち遅れた農村へと送り込まれた。一九六八年以降の知識青年の下放運動の原因については、紅衛兵組織が制御できなくなつたこと、都市における就業難等の解決という要因と、ある程度関係するかもしれない。人民公社の集団生活方式としての知識青年の生活は一つの世代とその家庭に強烈な印象を残した。知識青年たちの住まいは通常大きな長屋で、本来大学に進むべき年齢の若者たちが一緒に寝起きし、集団労働をしたのである。みんなで農民の家からトウモロコシや犬を盗んだりもした。辛く味気ない生活は、彼らの結婚を遅らせたばかりでなく、その後の国家に対して彼らを如何に処遇するかという大きな問題を残した。

「文革」の悲劇は、一つの国の政治・経済・社会構造がバランスを失う時、国の制度は現代性をなくし、国民の生活

様式も必然的に伝統的で遅れ、無秩序化したものになるということになった。中国国民の五〇年代から七〇年代末にかけての生活、特に精神生活と余暇は、事実上まだイデオロギーと理想主義の強い影響を受けていた。また、国民の物質的生活レベルはたいへん低く、商品は不足し、腕時計、ミシン、自転車、ラジオ（いわゆる「三転一響」）（三つの回転するものと一つの音がするもの）が七〇年代末まで依然として中国の国民生活における主たる憧れの製品であり、コネを使わなければ買えなかった。端的に言えば、一五〇年代は物事をわきまえず、六〇年代はやたらと騒ぎ、七〇年代は批判に遭い、八〇年代は愚痴ばかりであった。初めの三つは毛沢東時代における国民の政治生活の全体的特徴を成すものである。

三 改革後の中国国民生活様式の社会的転型

一九七八年末、時代を画する意義のある出来事が起きた。すなわち執政党である中国共産党の第一期三中全会開催である。この会議は「文革」中の極左路線に対する是正を行い、仕事の中心を階級闘争から現代化建設へと移行させた。ここから中国は鄧小平時代を迎え、現代化発展のスピード路線を歩むことになった。社会全体の経済・政治・文化

の巨大な変革にともない、中国国民の生活様式はわずか二〇年の間に、目も眩むばかりの驚くべき変化を遂げた。その前の三〇年間の国民生活様式の主旋律が階級闘争と理想主義であったとすれば、その後の二〇年間は現実主義と開放志向である。改革後において人々の生活様式に影響を与えた主な社会的要因としては次のものが挙げられる。

- (1) 体制・制度、経済・社会構造の変革
- (2) 国民経済の高度成長と生活レベルの急速な向上
- (3) 人々の価値観にきわめて大きな変化が生じたこと
- (4) 社会の開放度が高まり、「赤い文書」に取って代わったマスメディアが、人々が情報を得る重要な手段となったこと

後の二〇年間は前の三〇年間に比べ、国民生活様式の変遷に著しく異なる特徴があるため、われわれも異なる叙述方式を採る。すなわち前の三〇年間については時系列を主体とする叙述方式を用いたのであるが、後の二〇年間についてはいくつかの側面から人々の生活様式の変遷を描くことにする。

(一) 国による制御から生活自主性の増強へ

改革・開放以来、中国の社会生活と人々の生活様式の変化はまず社会経済体制と制度の改革から始まった。改革前に中国で実行されていたのは、高度に集中した計画経済と

行政システムが統一された体制であった。人々は当時の体制の特徴を「上級が下級を管理し、一級が一級を管理し、百姓に至る」という言葉で概括した。当時、国はさまざまな経済資源や社会資源を集中的に支配・管理したばかりでなく、人々の日常生活の領域までコントロールしていた。例えば当時にあつては結婚相手を見つけてもまず所属機関

の「政治審査」と許可を通らなければならず、さもないとあらゆる生活行為は制度的に合法性を有していないことになつた。あの頃はまた個人の独立した生活天地も認められなかつたから、日常的な会話の中でも正面から誰かの生活様式に話が及ぶことはほとんどなかつた。改革・開放後は、高度に集中した計画経済体制を改め、個人に対する国の全面的コントロールも緩められた。また階級、戸籍、職業、所有制上の身分を特徴とする社会制度体系も大きく改められた。これらは社会の成員が自主的・合法的に物質的利益を得るのに広大な空間を提供したばかりでなく、社会的地位の開放性と社会の流動性及び個人が生活様式を選択する自由度を増大させ、生活における個人的希求が認められるようになった。

中国の体制改革は、まず農村で政経合一の人民公社体制を改め、家庭生産責任制を實行することから始まつた。したがつて体制・制度の変革と農民の生活様式の変化を考察することが典型的意義を持つのである。八〇年代初めに生

産請負責任制が實行された際の農村生活については、杜潤生や陸学芸らの学者による多くの研究がある。筆者は九〇年代初めから長期にわたり黒龍江省肇東市昌五鎮において地域研究に従事した。この小さな鎮の数十年來の生活様式の変遷を分析してみよう。

昌五鎮はハルビン市の西北九〇kmのところに位置し、人口約四万。一つの町と一八の行政村から成る。この鎮は内陸地区にあり、近くに鉄道は走っていない。中国の沿海地域の農村と比べるとまだ開放度が遅い地域に属する。改革前、この地の農民は事実上公社・生産隊に対して従属関係にあり、戸籍制度の厳しい規制を受けていた。われわれの調査によれば、六〇年代には町に都市戸籍を有する人数が増加したが、基本的には都市戸籍を有する家庭で新たに生まれた人と都市戸籍を有する人の他所からの転入であり、真に「農村戸籍から非農村戸籍への転換」に属する人は四人のみであつた。農民は生産隊で労働するほか、自留地でいくばくかの葱や大根、白菜、茄子、煙草等を栽培することについてまで厳しい規定があり、これを守らなければ資本主義の「五つの根っこ」として抜かれてしまった。公社員が他所へ出掛ける場合は生産隊に休暇を願ひ出なければならず、外地で生計を立てようとすると戸籍、各種配給切符の強制的制約を受けた。ところが一九八四年にここで「大請負」が實行されるようになると、情況に変化が生じた。

農民いわく「鄧小平の一言が農民を二百日解放した!」(「大請負」実行後、生産積極性の高まりにより、今までの農作業時間を一年に二百日分短縮することができるようになったことを指す)。短縮されて余った時間で農民は工場勤務や商売をしたり、兼業・多角経営生産に従事することができるようになった。われわれの一九九三年の調査によれば、同鎮の農民の中で、純粹に農業のみに従事している者は五〇・八%で、二四・三%は農繁期には農業に従事し、農閑期には工場で働いたり商売をしたりする「兼業農家」となっていた。そのほかの労働人口はすでに農業以外の職業に転業した。工場勤務や商売に便利のように、少なからぬ農民が農村から町に引越したため、町の人口は改革初期の一・五万から一九九三年には二万人に増えた。こうした人たちの戸籍上の身分はやはり農民であるが、生活様式の面ではすでに都市化し、「町の人」と何ら違いがなくなっている。昌五鎮出身の数千人の農民が工場勤務や商売をしており、その足跡は省内外の各地にまたがっている。小さな鎮の一日の交通量は五千人近い。これによって旧来の閉鎖的生活様式は打破された。また、農業生産責任制が実行されるようになってから、農村の行政組織の制御機能は弱体化した。特にますます多くの農民が農業以外の産業に従事し、鎮内外のさまざまな社会機能組織との付き合いがより多くなると、彼らの活動は地域的組織の管轄をますます受けなくなっ

た。商売は一つの家庭が高所得を得る主要な収入源であるから、村の幹部までがしばしば家を離れてさまざまな商売に参画しているが、一旦市場に入ると、その役割や地位は村民と同等になり、どれだけ稼げるかは各自の市場経営における能力にかかっている。財布の中身がふくれている者が尊敬されるようになり、このため伝統的なランクや地位は無情にも打破されてしまったのである。したがってまさに経済・政治体制の変革や制度の変遷が農民を強制的にコントロールされる身分から解放し、市場経済の発展にともなっています多くの自主性を獲得させたのである。こうして真の意味において農民は自分で選択可能な生活様式を持つに至ったのである。

都市においては、改革前は国と社会は高度に一体化したものであった。ほとんどすべての社会成員が一定の社会「単位」に帰属し、すべての単位はまたそれぞれの行政ランクにしたがって国にコントロールされていた。さまざまな社会資源は高度に国に集中し、そこからそれぞれの行政ランクの単位を通じて資源の配分が行われた。各単位の従業員は生老病死は単位がすべて面倒を見たが、一旦どこかの単位に就職すると勤務先の変更はきわめて難しかった。こうして人々の中には依存性が生まれ、人任せ、受動的な生活様式の特徴と権力崇拜の意識が形成された。改革・開放後、次第に市場が社会資源配置の基礎となり、これによって国

が統一的に社会資源を配分するという構造が打破され、国と社会の分離が起こり、体制外の力が大いに増強された。

個人経営者、自由業者、私営企業主、外資・私営企業の被雇用者等新たな職業群が大量に出現した。さまざまな兼職が増え、社会的流動が大きくなった。こうしたことのすべてが、人々の単位に対する依存性を徐々に弱化させ、暮らしをよくするには自分の力を頼りとしなければならぬと思わせるようになった。こうして自立した、現代性を備えた生活様式が生み出されたのである。

勿論、中国の市場経済が成熟に向かい、さまざまな現代的制度が確立されるためには、さらに長い道のりを歩まねばならない。改革・開放以来、新旧二元体制の交替と衝突は人々の生活様式に反映されないわけにはいかない。「権力と金の取引」のような腐敗型の生活様式はすでに社会の公害となっている。また、特殊な行為規範で編み出された「コネクション」生活様式や、「大勢順応の」旧体制依存型生活様式等々がなお幅広く存在し、いずれも転型の困難さを現している。

(二) 生活資源の欠乏から充実へ

「生活様式とは個人がその資源支出（消費予算、時間予算、活動予算等）を如何に組織するかを指す⁽⁴⁾」。生活消費の充実、生活レベルの向上は、国民生活様式改善の物質的基

礎である。改革・開放が始まって以来、中国国民が得た最大の実質的恩恵は、物質的生活レベルの大幅な向上であった。信頼できる統計数字が示すところでは、一九七八年から一九九七年にかけて、中国の都市住民の一人あたり可処分所得は一四倍増となった。物価要因を控除すれば、実質二・二倍増である。農村住民家庭の一人あたり可処分所得は、一九七八年の一三三・六元から、一九九七年には二〇九〇・一元に増えた。物価要因を控除すれば、実質三・四倍増である。貯蓄残高は一九七八年の二〇一・六億元から、一九九七年には四六二・九八億元に増え、二一八・八倍増となった。この二〇年間で都市住民の生活パターンは、生存型から温飽型（衣食が一応足りている）への移行（一九七八～一九八四）、温飽型から準小康型への移行（一九八五～一九八九）、準小康型から小康型（まずまずの経済状態）への移行（一九九〇～一九九七）という歴史的時期を経てきた。これらはすべて「衣食住行楽」条件の改善に現れている。

「衣食足る」「衣食満ち足る」は中国人が何千何百年にもわたってそのために奮闘してきた理想であったが、改革前の品不足の時代には真にこの問題を解決することはできなかった。当時、住民は配給切符でごく少量の肉・卵・茶等の生活必需品を買うことができたのみだった。ところが今では住民の生活消費財の売り手市場がすでに形成されている。食において人々の求めるものは「腹をいっぱい

する」ことからすでに「うまいもの」へと移っており、味や栄養にこだわるようになった。一九九七年には、全国一人あたり消費量が肉類五二・五kg、卵類一七kg、乳製品六・六kg、水産品二九kg、野菜二五・三kg、果物四〇・四kgとなり、乳製品と果物以外は一人あたり消費量がすでに国際レベルに達するかこれを凌駕するかしている。中国予防医学科学院等の機関が一九九二年に完了した中国食事情研究の結果によれば、中国住民の食事においては、穀類といも類の消費量は著しく減少しており、動物性食品、油脂、酒類、果物の消費量が大幅に増加した。うち肉、卵、乳、脂肪の消費量はそれぞれ八一%、二〇〇%、三〇〇%、一六%伸びている。住民の一人一日あたりカロリー摂取量は二五八四キロカロリーで、すでに中等先進国のレベルに近づいている。都市住民のエネルギー係数は四三・四五%前後に下がった。食品消費方式の面では四つの変化が生じた。一つは料理技術を重んじるようになったこと。かつては、食品が足りなかったため、人々が食事をするのは主として腹を満たすためであり、料理法も簡単で、大鍋で一度に作った料理を何回にも分けて食べることもしばしばだった。現在では、炒める、煮る、揚げる、焼く、蒸す、あぶるといった料理法を手ずからやろうとするし、このためテレビの料理番組は大もてである。第二に、外食が増えたこと。特に春節などの祝日には、親戚や友人同士レストランで食事し、

さまざまな味わいの料理に舌鼓を打つことも多い。広州、上海等では朝食・昼食とも外食で済ませ、夕食だけ家族揃って家で食べる家庭がたくさんある。このため都市では飲食業が日増しに盛んになっている。第三に、調理済み食品や冷凍食品、インスタント食品、それに「ちよつと手を加えるだけ」の半製品の消費量が大幅に増加し、人々の生活のテンポアップの必要に対応していること。第四に、グリーン食品、健康食品を人々が争って買い求めるようになり、健康意識の増強を反映していること。

衣服の面でも誰もが認める変化が生じた。改革・開放前は人々の服装は「灰青色の海」であった。外国人には「青いアリ」と書かれた。その当時人々の所得レベルは低く、生地のない服を買う金のない人がほとんどだった。北方地域でこんな「順口溜」が流行ったことがある。「テトロンズポンをはいたら、腹の中はトウモロコシの切り株だ」。「テトロン」はありきたりの化繊であるが、当時はこんな生地のズポンをはくために腹を我慢させ、毎日トウモロコシの切り株を食うしかなかったのである。今では人々の服装も様変わりした。街角で足を停めてみれば、行き交う人のそれこそありとあらゆるファッションを目にする事ができる。人々が衣服の面で求めるものは、身体をおおう、或いは保温という目的をはるかに超え、また長く着られるようにという考慮も超えて、生活を美化することが重要な内容

になつてゐる。高級化、流行、そしてよりTPOに適つた、より快適で、より品位と格調のあるものへと發展してゐる。具体的な変化としては、

- (1) トレンディーの追求。都市においては、さまざまな最新ファッションが目まぐるしく移り変わり、品数も多く、技巧もきめ細かい。多くの農村でも、労働する場所でなければ、青年男女の服装は柄、種類、デザインともはや都市との顕著な差異はなくなつてゐる。
- (2) 個性化。審美レベルの向上につれ、服飾の面でも個性美を重んじることが人々の求める目標になつた。特に都市の若者は新、奇、美にこだわり、服装の標準化、画一化は永遠に過去のものとなつた。

- (3) ブランド品の追求。外国や香港・台湾のブランド品（ピエール・カルダン、金利来等）が中国で巨大な市場を有している。購買者はほとんどが個人で商売をしてゐる人や芸能人、社長、高級職員、「三資」企業の従業員等富裕な階層である。

中国は紡績大国であり、国民の衣服消費のために強大な工業の土台を提供している。一九九二年以降、中国の服飾品年生産量は八〇億件に達し、五年連続世界一の座を占めてゐる。一九九六年には全国の服飾品売上額が二七〇〇億元以上に達し、社会小売商品総額の一七%を占めた。

二〇年間に、中国人の家庭には「工業革命」が起きた。

八〇年代以前は、人々がカラーテレビ、電気冷蔵庫、洗濯機等の家庭用電器製品について語る際はまるで神話を語るようなものであつた。その当時の人々の「三種の神器」はまだ自転車、ラジオ、腕時計だったのである。ところが二〇年間に都市・農村の家庭の耐久消費財や家庭用電器製品は驚くべき速さで普及していった。八〇年代初めから一九八五年頃にかけては、家庭の耐久消費財といえば白黒テレビ、洗濯機、カセットレコーダー、電気扇風機等であつた。一九八六年からはこれがカラーテレビ、電気冷蔵庫、カメラ等に変つた。一九九〇年から一九九五年にかけてはエアコン、ビデオ、バイク、撮影機、ステレオに変つた。さらに一九九六年以降は電話や移動電話、コンピュータ、大画面高級カラーテレビになり、乗用車を買おうとしてゐる者もいる。多くの家庭で「台所革命」が起き、各種台所用電器製品（電子レンジ、電気炊飯器、電気コンロ、皿洗い機、電気グリル及びシャワー、暖房等）がすでに相当普及しており、家事労働の負担を軽減して、幾多の家庭の生活に便利さをもたらしている。

住宅状況と居住環境は都市・農村住民生活の基本要素の一つであり、社会の發展レベルと住民生活様式の状態を量る重要な目安でもある。改革・開放前においては、中国の都市住宅はずっと国が一手に請け負う福祉的分配制度を實行してゐた。「まず生産、それから生活」、「まず仕事場、そ

れから住みか」という極左政策の指導のもと、住宅投資は最低点にまで下がった。特に「十年の動乱」期間には空前の住宅難が形成された。一九七八年には、都市住民の一人あたり居住面積はわずか三・六㎡であった。解放初期の四・五㎡に比べても一㎡近く低くなったのである。改革・開放が始まってから政府は毎年巨額を投じ、長年にわたって蓄積された住宅難というツケを償ってきた。九〇年代に入ると、住宅の商品化がしだいに加速化され、多くの都市の住民たちがこつこつと蓄えてきた金を出して「不動産」を買い求めるようになり、住民の住宅改善の速度がさらに速まった。世界銀行の専門家は中国の住宅建設を視察した後、「中国の住宅の成果は国際基準からみても、記録的なものである」と評価した。一九九七年の都市住民の一人あたり居住面積は八・八㎡に達したし、農村住民の居住面積は一九七八年の八・二㎡から一九九七年には二二・四六㎡にまで増えた。経済成長の速い江蘇省南部、浙江省東部等の農村地域では、別荘のような農家がよきよきと建っている。住民の居住面積が増えるのと同時に、住宅設備も著しく改善された。少なくとも八五％の新規移転所帯が内装を施し、一九九六年には内装業年間生産額が五〇〇億を突破したが、家庭用住宅が消費の主体となっている。このほか、外出においてもより多くの利便性を享受できるようになった。「公共交通」の改善と同時に、一九九五年末には、全国のタクシー

は五〇万台以上に達したが、今ではさらに数百万台にまで増えて、八〇三都市に及んでいる。これとともに遠距離の鉄道、道路、航空路の条件も大幅に改善され、一九九六年末には、九五％の町と七四％の村にバスが通うようになった。

改革・開放以来、中国の都市住民は金ができただけで、「暇」も得た。これは主として二つの要因による。一つは生活レベルの向上により、都市住民が家事労働に費やす時間が大幅に減り、余った時間は主として余暇にあてられるようになったこと。二つ目は、一九九五年五月一日より、週五日制が実施され、職員・労働者の週間労働時間が四八時間から四〇時間に短縮されたことで、これが人々の生活に少なからぬ恩恵をもたらした。われわれが一九八〇年と一九八八年にハルビンとチチハルで行った調査によれば、一九八〇年の都市男女勤労者一日あたりの家事労働時間はそれぞれ三・九時間、五・二時間で、余暇時間は三・〇一時間、一・四一時間しかなかった。一九八八年になると、男女勤労者の家事労働時間はそれぞれ二・五九時間、三・五時間にまで短縮された。そして余暇時間が三・九六時間、三・一〇時間に増えたのである。また北京市が一九八六年と一九九六年に行った住民の時間配分の調査データによれば、一九八六年には、北京市の一五歳以上の住民の一日あたり家事労働時間は二時間二八分、余暇時間は四時間三九分であったが、

一九九六年の家事労働時間は一時間五一分に減り、余暇時間が五時間三分に増えた。調査対象とした都市が異なるため、ある程度の地域差が存在するとしても、映し出された全体的傾向は代表的なものである。二〇年間に都市住民の余暇生活には以下のような変化が生じた。

(1) 余暇に投じる支出の著しい増大

国家統計局の発表した数字によれば、一九九七年の都市住民一人あたり文化教育娯楽支出は四四八・四円で、全消費支出に占める割合が一九七八年より四ポイント上がった。

同年の農村住民の文化教育娯楽支出は一四八円で、消費支出に占める割合は一九七八年の一％足らずから九・二％に上がった。

(2) 余暇活動の内容やスタイルの多様化

読書や新聞、テレビ、スポーツ等の活動のほか、観光や外国旅行も多くなった。

(3) 余暇の文化的レベルアップ

読書、パソコンネット、各種の通信教育で学ぶ者の数が大幅に増え、高尚な芸術が歓迎されるようになった。余暇を利用して創作や発明にいそしむ人も増えてきた等々。

また、改革・開放後の都市化の加速化にともない、ますます多くの人が都会的な生活様式を享受できるようになった。

しかしながら改革・開放の二〇年間には、人々の物質的

生活レベルの向上にともなうマイナス効果もある。まず、生活条件が改善されると、人々はさまざまな「ぜいたく病」に罹るようになった。高脂肪、高カロリーの美食が血液や脂肪の代謝異常を招き、心臓・血管の病気が都市住民の死亡の重要な原因になった。栄養過多と栄養のアンバランスは一方では青少年の間に「肥満児」を増やし、一方では栄養不良を引き起こしている。流行のファッションや美容は乳腺癌、皮膚病、婦人科疾病、関節炎、生理機能障害等の病状を誘発している。行き過ぎた娯楽や、家庭用電器製品による輻射、室内汚染はまたさまざまな心理的疾患、免疫力の低下、眼疾等の生理症状を誘発する。次に、ますます激しくなるぜいたくな消費、奇形消費、愚かな消費の存在がある。例えば愚かな消費であるが、紅（結婚）、白（葬式）、灰（義理）、黒（迷信）のために使う費用は驚くべきもので、「生きることはできても、死ぬに死ねない」という現象まで起きている。このほか、都市・農村住民の生活レベルが普遍的に高まっている一方、農村ではなお一億以上の人が貧困から脱却していないし、都市でも一三〇〇万人あまりは貧困ライン以下の暮らしをしている。大量のレイオフ勤労者の生活には程度の差はあれ困難が存在する。関連研究機関の推定によれば、中国国民の生活の質は世界一二〇か国の中ではなお中の下のレベルにあるという。

(三) 「生き方を変えよう」

九〇年代に、中国の庶民、特に若者の間で、しばしば心の奥から発せられる声が聞かれた。「生き方を変えよう」というのである。これは人々が今までとは異なる生活様式を追い求めていることを集約的に現すものである。生活様式はもともと価値観を体現したものであるから、中国人の中に新たな価値観が芽生えたことは、まさしく中国人の生活様式に巨大な変化を生じさせる内在要因である。改革・開放以来、人々の新たな価値追求は中国の国民生活様式に次のような傾向の変化を起こさせた。

第一に、他律型、画一的横並び型の生活様式から自主型、個性化した生活様式への移行。改革前にこんな話が流布したことがある。某都市の環境衛生部門が、夏には散水車の運転手は毎日必ず午前一〇時きっかりに道路に散水するべし、と定めた。ある日、午前一〇時にちょうど大雨が降って来た。ところが運転手はいつも通りに車を出して散水に行った。運転手に「雨が降つてるといふのに、何で水を撒くんんだ？」と尋ねると、運転手答えていわく、「係長が毎日時間通りに水を撒けつていふんだ」。この話はある時代の他律型の人格と生活様式の特徴を典型的に映し出している。あの頃、社会組織は往々にして人々の生活行為や生活様式が「枠をはみ出さない」ように求めた。こうした情況は改

革の初期になつてもまだ存在していた。例えばある職場では従業員の髪の長さ、靴のかかとの高さ、ズボンの幅についてまですべて規定し、守らなければ「精神汚染」だとした。だが現在では市場価値理念の主導下で、人々はかつてのような卑屈さを改め、自立、自主、自助努力の新たな人格を樹立し始めた。生活様式の面では「あか抜けていること」、自由自在さを追い求めるようになった。王朔の「調侃」(茶化し)小説、崔健のロック、ジャッキー・チュン(張学友)らのポップ歌謡が若者の間で流行して衰えるところがない。こうした情況は経済開放地域においてさらに際だって現れている。厦門、深圳、珠海、汕頭の四特区で青少年を対象として行つた調査によれば、職業群ごとに似つた価値観と生活様式への希求を有している。例えば政府機関の幹部は「原則、友情、愛情」を選択する頻度が比較的多く、工場長、社長の間では「人格、享楽、地位」を生活様式の志向としている人が多い。青年勤労者と個人営業者は「金銭、享楽、愛情」を生活様式の目標としている。「重任を担うべき人材が、何ぞ小草にならん」という自己達成感及び家庭、婚姻、交際、余暇等の生活領域におけるあらたな生活パターンの不断の追求がまた彼らに共通する特徴となつている。

第二に、理想主義、禁欲主義から実利の追求へ。過去の時代においては人々は「革命」「理想」「無私貢献」のイデ

オロギー的零困氣の中で生活し、禁欲主義が盛んであった。生活領域にこれが反映され、飲食や遊び、おしゃれにうつつを抜かすのは罪悪だと考えられがちだった。当時、生活において貧しさを恐れる者はいなかった。人々に共通の心理は、君も貧しく僕も貧しい、貧困に安んじこれを楽しむ、というものであった。改革後、人々は市場経済を通じて利益を得、金儲けをし、生活を改善し、生活を楽しむという合理的な考え方を受け入れた。かつての「貧困に安んじ富を恐れる」という心理から、富にあこがれ富を求めるという心理に変わった。こうして都市・農村には「下海」「いなか者が街へ行く」という大きなうねりが出現し、生活の実利化がもたらしたものは、消費スタイル・生活様式全体の変化であった。

第三に、礼俗重視から効率重視へ。過去においては中国人の生活行為はなお相当程度、古めかしい人情、礼俗觀念の支配を受けてきた。改革・開放後、人々は次第に目的達成合理主義を形成し、貨幣獲得能力と功利性、効用性が人々が物事を考慮する際の重点となった。こうした変化は農村にまで及んでいる。例えば先に挙げた昌五鎮には次のような変化が生じた。今までだったら、農民がオンドルを拵えたり壁を塗ったりする時や、家を立てたり修理したりする時、或いは井戸掘り等々の際には村人の「助け合い」という形を採っていた。どこかの家ですわ工事となるとたちま

ち助つ人が集まつてきた。終わると皆を食事や酒でもてなさねばならず、結果的には金の節約にはならないこともしばしばだった。ところがこの村民も工場勤めや商売をする人が多くなると、人々はもう助け合いの形を踏襲するのはやめて、市場のルールに従つて人を雇うようになった。雇われる者が親戚であつても仕事ぶりで値段を決める。その結果、余計な気遣いをしなくてすむだけではなく、効率も上がり、その分省けた時間や力をもつと金を儲けることに使うことができるようになった。「時は金なり、効率は命なり」という考え方が次第に人々の心の中に浸透していることを示している。

第四に、閉鎖から開放へ。改革・開放以来、市場経済の発展と世界経済の一体化の衝撃、及び交通の発達や国境・地域を越えた観光業の発展にともない、特に急速に発展するテレビ、新聞・雑誌などのマスメディアやインターネットのインパクトを受け、人々の地域間流動や国際交流が増え、得られる情報量も大幅に増加した。このため人々の心理・生活上の閉鎖状況は打破され、人々は思わず「外の世界はすごい」と叫ぶようになった。こうして皆むざばるようにならぬ文化や生活様式を吸収したのである。こうした生活様式の開放性はまず先進国の消費スタイルの模倣に現れた。外国の飲食、ファーストフード、ブランドファッションが中国になだれ込み、アメリカや日本等の国と同様の消

費觀念や消費スタイルまで出現した。ほとんど同時にハリウッドの「大作」やテレビ番組が見られ、同じように大衆文化が流行るようになったのである。これらの傾向は当然ながら婚姻、家庭、性に対する態度にも映し出された。アメリカのクリントン大統領のセックスキャンダルはむしろ中国の方がより寛容に受け止められた。「苦しかったらサダムを思い、うまくいかなかったらクリントンを思え」という台詞が一〇億人の視聴者を擁する中央テレビ局の「春節文芸の夕べ」番組の寸劇の中に現れるまでになった。この事実そのものが歴史の進歩であり、中国で起きた生活様式のグローバル化傾向を人々は「暑さ寒さを地球と共有」と形容している。

(四) アンバランスな生活様式

二〇年来の改革・開放政策の推進によって、中国国民の生活様式には驚くべき変化が生じ、大きな歴史的進歩を遂げた。しかしながらこれと同時に、憂慮すべき社会問題もまた大量に生まれ蓄積している。経済の未発達と旧体制の束縛が国民生活に与えた苦しみを取り除かれつつある一方で、急激な社会転型と体制転換が国民の生活領域に新たな苦しみをもたらしているのである。一般的に「早発現代化」国家で現代化のスタート段階において生ずる社会問題が、中国にも程度の差はあれ存在する。そして激しい転型社会

的特徴として、往々にして国民生活様式の領域においてより大きな、より多くの動揺・衝突・無秩序・逸脱現象を生む。全体的な特徴は生活様式のバランス喪失と概括することができよう。

こうしたアンバランスはまず物質生活と精神生活の關係に現れる。すなわち、拝金主義の横行、金錢の占有と物欲の享受をすべての価値基準と人生目標の上に置くことである。人々は「理想主義」、「ヒロイズム」を棄てると同時に過度に功利主義化し、崇高さをも捨て去った。社会風潮の上での現れは、物欲の横行、道德觀の低下である。一部の人は金はできたものの、生活の中身には文化的なものが欠けており、精神は空虚で、麻薬吸飲・販売、売買春などの醜惡な現象が再び息を吹き返した。中国は人情を重んじる社会であるが、ある意味では現在の社会には「人情の流失」現象が起こっている。家庭内や社会での人と人との感情は冷めたものになり、人が死にそうになっているのを見ても助けまいという現象も時には発生している。これについて世間ではこんな言い方が流行っている。「五〇年代には人が人を助けた。六〇年代には人が人をやつけた。七〇年代には人が人に対して身構えた。八〇年代には人が人を騙した。九〇年代には各人が自分のことしか考えない。」その結果は、以前は不足しがちだった人々の物質生活が改善され、一部には金持ちになった者も出てきたが、彼らは「物」

に呑み込まれ、精神生活上は「貧血症」や「敗血症」に罹っている。商品の大波の中で現れた「貧しい消費貴族」たちが「われわれには金しか残らないほど貧しくなってしまう」と叫ぶのもむべなるかな。したがって中国が解決しなければならぬのは、経済の未発達ゆえにもたらされた旧社会の苦しみがまだ取り除かれてない状況のもとで、如何にして新たな社会の苦しみを減らすかという問題である。

もう一つのアンバランスは人々の生活様式の追求と環境保護の間に現れている。改革後の中国国民はさらに生活条件をよくしたいという強烈な衝動を有している。しかしながら今までのような、先進国の工業化においてむやみに拡大を追求する生産パターンと高消費、高浪費の生活パターンはすでに深刻な生態の危機と「人類の困難」を招いている。一二億人以上いる中国人が消費欲を高め、同じように浪費型の生活様式を追い求めるパターンを踏襲するならば、中国人は低劣な生態環境の中で暮らすことになる。また地球全体の環境への影響も大きい。現在この面ではすでに深刻な問題が山積している。環境公害は都市住民の生活の質に影響を及ぼす最も深刻な問題になっている。生活の質の向上と資源・環境保護との間に調和のとれた関係を打ち立てるための努力が、将来的に解決を要する問題となっている。

さらにもう一つのアンバランスは、地域間・社会集団間

の所得水準の格差の増大である。例えば都市住民所得のジニ係数は、一九七八年には〇・一六六だったものが、一九九四年には〇・三七七に拡大した。農村住民の個人所得のジニ係数は一九八二年には〇・二二だったのが、一九九四年には〇・四四五に拡大した。「五分分オシマ係数」によって中国の家庭の所得上の格差を量ると、一九九四年には都市住民中二〇%の最富裕家庭が国民所得全体の四四・四六%を占めているのに対し、二〇%の最貧困家庭は国民総所得の六・〇四%を占めるのみである。農村にいくとこの格差がもっと大きく、二〇%の最富裕家庭が総所得の四八・七九%を占め、二〇%の最貧困家庭は総所得のわずか四・五九%しか占めていない。都市と農村を一緒に計算すると、二〇%の最富裕家庭の所得が一九九四年には五〇%を超えたのに対し、二〇%の最貧困家庭は四・二七%しか占めておらず、こうした貧富の格差は一九九〇年のアメリカより大きい。世間ではこうした生活上の格差を形容するあれこれの言い方が流布している。例えば、「海辺の人は金持ちになる。露店を出す者は財産ができる。勤労者は貧乏になる。僻地の者は騙される」。権力を振りかざして贅沢な生活をする者に対して人々ももっと不満を抱いている。農民は一部の幹部を形容して言う。「たばこ一本、油少々、飯一回、牛一頭、尻の下には小洋館」（公金で高級乗用車を買うこと）。このような腐敗した生活様式は、執政党と政府のイメージを損ねるだけで

なく、社会の安定にも影響を及ぼし、公平な競争の環境確立に不利である。

四 二一世紀における 中国国民生活様式の方向

以上、中華人民共和国成立後の五〇年間に於ける国民生活の変遷を大雑把に描いてみた。五〇年間のうち前の三〇年を重々しい白黒のモノトーンで撮った写真とするならば、後の二〇年は明るいカラー写真である。中国人がこの五〇年の道程を歩み終わる時がちょうど千年の境目であり新世紀を迎える時にあたる。それでは将来の中国国民の生活様式にはどのような変化が生じるのだろうか。これは、中国国民の生活様式の五〇年間の変遷を描いた後に当然提起されるべき問題である。

生活様式は非常に複雑な社会現象であるが、それを生成する基本的社会条件によってその可能な発展傾向を把握することができる。まず、経済の発展、国民生活の改善がやはり中国政府の追求する基本目標であろう。中国では今後二、三〇年間は依然として比較的高い経済成長速度を維持し、大多数の人々の生活レベルは準小康型、小康型から準富裕型、富裕型への移行を実現するであろう。これは生活様式の進展のためにより豊かな物質的基礎を提供する。今

後二〇年間、消費の主流は依然として大衆消費であり、消費スタイルは実用、模倣型から個性化へと変わっていくであろう。サービス形態の消費、観光、文化、レジャー消費が著しく増加する。信用消費が人々の消費観念の変容をもたらすが、都市と農村の消費の格差はやはり引き続き存在するであろう。しかし消費レベルにおける地域間格差はやや縮小されよう。

次に、科学技術、特に情報技術を中核とするハイテクが生活様式を変える重要な要因になるであろう。九〇年代後期、中国国民の個人もしくは家庭における電話・移動電話、コンピューター所有数、及びネット加入者数はほとんど毎年四〇%以上のスピードで増えてきた。このスピードが次の世紀まで持続され、情報製品が多くの中核に入り込み、人々の生活の各領域に浸透するであろう。これは中国国民の生活様式に革命的な変化をもたらす、生活の質を大きく高めるはずである。防止しなければならないのはハイテクの影響下における精神性の低下である。

さらに、世界経済の一体化、国際観光、マスメディア、立体交通等により、人々の生活も世界的規模での連携がますます緊密になり、生活様式の開放性とグローバル化の傾向が増強され、人々の生活様式はより一層多元化し、民族の文化的個性は衝撃を受けるだろうが、生活様式のグローバル化と民族の個性の間のバランスを探し当てること、が、

人々が解決に努めるべき重要な問題となるであろう。中国と日本両国の学者にとつては、未来のさまざまな文明が共存する時代に如何にして東方文明の根底を守り、これを発揚させるかということも、重要な課題である。

また、二一世紀の中国は巨大な生態環境と人口の圧力に直面することになる。二一世紀の三〇年代に中国の人口は一五〜一六億に達するとみられるが、環境の質が人々の生活の質に影響を及ぼす、より主要な制約要因になる。将来においては、持続的発展を実現するという考え方が次第に人々の共通の認識に変わり、環境負荷の少ないグリーン消費、「健康第一」が人々の関心の焦点となっていくであろう。単純に消費レベルを上げるのではなく、生活の質の向上に努めるのだという意識が強くなるはずである。中国東部の発達地域や大都市では、人々はもはや「量」の満足に重きを置かず、適度のカロリー・脂肪を選択し、環境の美しい、精神文化の充実した生活パターンを重んじるようになっていく。二一世紀の中国人の家庭構造はより核家族化し、高齢化と一人っ子現象のもたらす社会問題がさらに際だつていくことになる。地域社会サービス・社会保障がより大きな度合いで、家庭で老人の面倒を見るというパターンや育児のパターンに取って代わることになるであろう。とはいえ多くの農村地域ではやはり家庭で老人の面倒をみて育児もするというのが主要なスタイルであろう。

二一世紀に歩み入ろうとする時にあたり、中国は工業化の中期段階に入るが、社会転型の内実に変化が生じ、農業文明と工業文明、情報文明の同時共存という発展過程に身を置くことになる。未来の世界には人類の生存に影響を及ぼす要因が多く、予測できない要因も存在する。しかしながら主導力は社会の情報化と平和的環境の再構築である。この過程は矛盾とアンバランス、困惑に満ち、人々の生活様式に影響を及ぼすものとして多くの不確定要素があるはずだ。総じていえば、将来に向けて中国人は、自分に属する、独自の魅力を持つ生活様式の創造に対して大きな好機を有している。しかしこうした好機はつかの間のもので、同時に困惑と難題が満ちている。これらはすべて、新たな生活様式を築こうとする中国人の知恵と能力に挑戦するものである。

注

(1) 張琢編『当代中国社会学』中国社会科学出版社、一九九八年、三五〇—三六九頁参照。

(2) 「仏」シェホナイ「謝和耐・音訳」著、劉東訳『蒙元入侵前夜の中国日常生活』江蘇人民出版社、一九九八年、一八六頁。

(3) 俞吾金『意識形態論』上海人民出版社、一九九三年、六四頁。

- (4) 胡繩『中国共産党的七十年』中共党史出版社、一九九一年、二七三—二七七頁。
- (5) ダーク・ボード『徳克・博徳…音訳』『北京日記——革命の一年』二三五頁。
- (6) 金春明他『不平凡の七十年』遼寧人民出版社、一九九一年、三—三三頁。
- (7) ラルフ・ラプウト『ラル夫・ラ普伍徳…音訳』、ナンシー・ラプウト『南希・ラ普伍徳…音訳』『中国革命縦覧』六九頁。
- (8) 袁方『社会指標与社会發展評価』中国労働出版社、一九九五年、一〇七、一〇八頁。
- (9) ロツマン『羅茲曼…音訳』他『中国的現代化』江蘇人民出版社、一九九五年、六四—一六四三頁。
- (10) 費孝通『論小城鎮及其他』天津人民出版社、一九八六年、一六七頁。
- (11) 馬寅初『新人口論』『人民日報』一九五七年七月五日。
- (12) 魯丹『七〇箇日日夜夜——大学生眼睛里的一九五七之春』光明日報出版社、一九九六年。
- (13) 黃平『未完成的叙説』四川人民出版社、一九九七年、三四—三九頁。
- (14) 『独』オイケン『奥伊肯…音訳』『生活的意義与価値』上海訳文出版社、一九九七年、六五—七一頁。
- (15) 国家統計局『光輝の三十五年』中国統計出版社、一九八四年、一六三頁。
- (16) 謝春涛『大躍進狂瀾』河南人民出版社、一九九〇年、二五頁。
- (17) 趙雲山他『徐水共産主義試点始末』『党史通信』一九八七年第六期。
- (18) 謝、前掲書、二七頁参照。
- (19) 『人民日報』一九五八年九月一日。
- (20) 顧准『顧准日記』(一九五九—一九六〇) 光明日報出版社、一九九七年参照。
- (21) 『米』R・マックファーカー、フェアバンク『劍橋中華人民共和國史』(一九六六—一九八二) 中国社会科学出版社、一九九二年、七三八、七三九頁参照。
- (22) 汪丁丁『烏托邦与伝統——永遠的徘徊』『讀書』一九九五年第三期。
- (23) 凌志軍『歴史不再徘徊——人民公社在中国的興起和失敗』人民出版社、一九九七年、六〇—六二頁。
- (24) 『日』富永健一『社会学原理』社会科学文献出版社、一九九二年、三—三頁。
- (25) 『英』ジョン・ジエン『約翰・基恩…音訳』『公共生活与晚期資本主義』社会科学文献出版社、一九九九年、一七—一九九頁。
- (26) 張楽天『告別理想——人民公社制度研究』東方出版社センター、一九九八年、三七—四一頁。
- (27) 『米』ポニー・カイエン『彭尼・凱恩…音訳』『中国大飢荒』(一九五九—一九六二)、中国社会科学出版社、一九九三年、一二頁。
- (28) 凌、前掲書、八〇、八一頁。

- (29) 胡鞍鋼『生存与發展』科学出版社、一九九六年、三九頁。
- (30) Justin Yifu Lin, *Collectivization and China's Agricultural Crisis in 1959-1961*.
薛炎文他『票証旧事』百花文芸出版社、一九九九年、五、六頁。
- (31) [米] ジョージ・E・マルクス [喬治・E・馬爾庫斯：音訳] 他『作為文化批評の人類学』三聯書店、一九九八年、一一四、一一五頁。
- (32) 楊健『文化大革命中の地下文学』北京朝華出版社、一九九三年、三九一—五〇頁。
- (33) 同右、二四五頁。
- (34) 金春明『文革時的怪事怪語』求実出版社、一九八九年。
- (35) 王年一『大動乱の年代』河南人民出版社、一九九六年、一七一—二二三頁。
- (36) 金石開『歴史的代価——文革死亡檔案』中国大地出版社、一九九三年。
- (37) 劉小萌『中国知青史——大潮』（一九六六—一九八〇）、中国社会科学出版社、一九九八年、一一四頁。
- (38) 孔慧雲『知青生活回憶』山東画報出版社、一九九八年、二六—七二頁。
- (39) [独] ウォルフガング・チャプフ [沃尔夫岡・查普夫：音訳] 『現代化与社会転型』中国語訳、社会科学文献出版社、一九九八年、二二頁。
- (40) 王雅林『城鎮居民時間預算研究』『中国社会科学』一九九一年第二期、一九三—二一九頁。

- (42) 王琪延『北京居民生活時間的分配狀況』『中国青年報』一九九七年四月二六日八面。
- (43) 譚建光『中国現代化与人的發展引論』中国国際出版社、一九九三年、二二四—二二八頁参照。
- (44) 王培暄『收入差距拡大格局中の貧困』『社会学』（上海）一九九九年第一期、三三頁。

主要参考文献

- 王雅林『生活方式研究概述』『社会学研究』一九九五年第四期
[米] R・マックファーラー、フェアバンク『劍橋中華人民共和國史（一九六六—一九八二）』中国社会科学出版社、一九九二年
- [仏] シェホナイ [謝和耐：音訳] 『蒙元入侵前夜の中国日常生活』江蘇人民出版社、一九九八年
- 兪吾金『意識形態論』上海人民出版社、一九九三年
- 胡繩『中国共産党的七十年』中共党史出版社、一九九一年
- 金春明他『不平凡的七十年』遼寧人民出版社、一九八四年
- 国家統計局『光輝的三十五年』中国統計出版社、一九八四年
- 袁方『社会指標与社会發展評価』中国労働出版社、一九九五年
- ロツマン [羅茲曼：音訳] 他『中国的現代化』江蘇人民出版社、一九九五年 (Gilbert Rozman, *The Modernization of China*, 1982)
- 費孝通『論小城鎮及其他』天津人民出版社、一九八六年
- 馬寅初『新人口論』『人民日報』一九五七年七月五日
- 魯丹『七〇箇日日夜夜——大学生眼睛里的一九五七之春』光

明日報出版社、一九九六年

黃平『未完成的敘說』四川人民出版社、一九九七年

謝春濤『大躍進的狂瀾』河南人民出版社、一九九〇年

顧准『顧准日記』（一九五九—一九六〇）光明日報出版社、一九九七年

凌志軍『歷史不再徘徊——人民公社在中國的興起和失敗』人民出版社、一九九七年

年

〔日〕富永健一『社会学原理』社会科学文献出版社、一九九二年

張樂天『告別理想——人民公社制度研究』東方出版社中心、一九九八年

ボニー・カイエン

〔彭尼・凱恩：音訳〕『中国大飢荒』（一九五九—一九六二）、中国社会科学出版社、一九九三年

胡鞍鋼『生存与發展』科学出版社、一九九六年（Penny Kane, *Famine in China 1959-61: Demographic and Social Implications*）

Justin Yifu Lin, *Collectivization and China's Agricultural Crisis in 1959-1961.*

薛炎文他

『票証旧事』百花文芸出版社、一九九九年

〔米〕ジョージ・E・マルクス

〔喬治・E・馬爾庫斯：音訳〕他

『作為文化批評の人類学』三聯書店、一九九八年

楊健『文化大革命中の地下文学』北京朝華出版社、一九九三年

金春明『文革時の怪事怪語』求实出版社、一九八九年

王年一『大動亂の年代』河南人民出版社、一九九六年

金石開『歷史的代価——文革死亡檔案』中国大地出版社、一九九三年

九九三年

劉小萌『中国知青史——大潮』（一九六六—一九八〇）、中国社会科学出版社、一九九八年

孫慧雲『知青生活回憶』山東畫報出版社、一九九八年

陸学芸『聯產承包責任制研究』中国社会科学出版社、一九八六年

王雅林『繁雜的超越』黑龍江人民出版社、一九九六年

王雅林『換一種活法』——中国社生活方式与現代化』中国社会科学出版社、一九九八年、五九—九〇頁

王玉波、瞿明安『超越(伝統)』京華出版社、一九九七年

王雅林、張汝立『延伸地帯——昌五社区研究』黑龍江教育出版社、一九九九年

○頁

Wolfgang Zapf, *Modernisierung, Wohlfahrtsentwicklung und Transformation*, Ed. Sigma, 1994.

王雅林、張汝立

『延伸地帯——昌五社区研究』黑龍江教育出版社、一九九九年

王雅林、張汝立

（邦訳 馬場節子）